

祈りの文脈：『カトリーヌ・ド・ローアンとフランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』

田辺, めぐみ
帝塚山学院大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/26087>

出版情報：Stella. 31, pp.147-161, 2012-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



祈りの文脈^{*)}

——『カトリヌ・ド・ローアンとフランソワーズ・
ド・ディナンの時祷書』——

田 辺 め ぐ み

平信徒が日々の祈祷のために使用していた時祷書は、すべての惨禍の要因を人間の罪に求め、改悛と救済が希われていた中世末期の「祈りのかたち」である。それゆえに写本の注文主・所有主の信心や救済祈念が様々な図像・装飾に確認されてきた。いっぽう祈りの私的側面については、典礼の基本的要素をなさない祈祷文にのみ指摘されることが多かった¹⁾。

しかしながら写本の注文・制作経緯を踏まえれば、従来無意味と見なされてきた彩飾にも個人的な祈念内容を確認しうることが近年の時祷書研究から明らかにされている²⁾。そこで本稿では同様の見地から『カトリヌ・ド・ローアンとフランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』（以下「フランソワーズ時祷書」と略記）〔図版1-6〕³⁾の図像・装飾プログラムを多角的に考察し、亡夫の魂の救済を希求する写本所有主のさまざまな祈念表象を明らかにしたい。

写本構成における諸問題

ブルターニュ侯の侍従であったジャック・ド・ディナンの妻、カトリヌ・ド・ローアン（1415-1468）と、彼らの一人娘であるフランソワーズ・ド・ディナン（1436-1499）の名が冠された時祷書は、現在2冊のコデックスと1葉で構成されている。まず106葉のコデックス（整理番号 ms. 34）に含まれるのは「受難の時祷」、「聖母の嘆きの時祷」、2つの「聖母への祈り」、「とりなしの時祷」、「アレキサンドリアの聖カテリナの時祷」、「聖フランチェスコの聖務日課」である。各祈祷の冒頭に施された半頁大ミニアチュールは33点にも上る。子牛の皮の装丁には18世紀に美術愛好家として名を馳せていたロビアン家の紋章跡

が確認できるため、革命期に没収された写本であることがわかる⁴⁾。

いっぽう 1985 年にロンドンで購入されたコデックス（整理番号 ms. 34 bis）には、黒鞆しの装丁にシミアの銘が認められるため 1814 年から 10 年にわたるルイ 18 世の御代に製本されたことが確認できる⁵⁾。10 点の半頁大ミニアチュールで彩られる 136 葉は「月暦」にはじまり、「四福音書読誦」「聖母の時祷」「十字架の時祷」「聖霊の時祷」「待降節の聖務日課」「悔悛詩篇」「連祷」そして「死者の聖務日課」に終わっている。かかる構成内容が時祷書の前半部分をなすものであることは明白である。未だ数葉を欠くコデックスではあるが⁶⁾、翌 1986 年に新たに競り落とされた一葉をもって「聖母の時禱一時課」冒頭の欠如部分が埋められている⁷⁾。

18 世紀に分断されたさいに異なる方法で装丁されたためか、各コデックスの装丁・寸法には相違が認められるものの⁸⁾、写本ページの行数や書体、彩飾形態は一貫しており、現在のフランソワーズ時祷書にみる再構成方法に問題はなからう。ただしその注文・制作過程については解明しがたい問題が残っており、先行研究では異なる見解が提示されてきた。

まずフランソワーズ時祷書の再構成に多大な貢献をしたエバーハルト・ケーニヒは、フランソワーズの紋章〔図版 1-2〕に描き換えの形跡を指摘し、時祷書はカトリヌ・ド・ローアンのために 1435 年頃制作された後、娘のフランソワーズがラヴァルのギィ 14 世（1406-1486）と 1451 年に再婚した際に譲渡されたことを推察している⁹⁾。こうした母から娘への写本の継承過程は、「アレキサンドリアの聖カテリナの時祷」と「聖フランチェスコの聖務日課」の存在・配置方法からも辿られている。時祷書の基本的要素をなす両祈禱文が母子と同名の聖人に捧げられていることに、ケーニヒは 2 人の写本所有者の意向を看取したのである。また彼は、「聖フランチェスコの聖務日課」が巻末に挿入されていることを、フランソワーズの所有となった際に時祷書に数葉が追加された証左ともしている。断続的な制作期間にもかかわらず様式が終始一貫している理由については、レンヌに活動拠点を置いていた通称「フランソワーズ・ド・ディナンの時祷書の画家」（以下「フランソワーズの画家」と略記）がすべての彩飾を担ったことに帰し¹⁰⁾、レンヌにおける写本画アトリエの存在を推察する上での指標としている¹¹⁾。

いっぽう中世末期におけるブルターニュ写本の包括的な研究をおこなった

図版 1

フランスワーズ・ド・ディナンの祈禱像



図版 2

フランスワーズ・ド・ディナンの祈禱像



図版 3 『キリストの洗礼』

ディアン・E・ブートンは、同一の画家と写字生が20年有余を経た後に再度共同作業したとは考えがたいとし、フランソワーズ時祷書はカトリーヌの結婚直後に注文・制作され、再婚する娘への寄贈にさいし紋章のみが描きかえられたと推察している。同様の見地からブートンは、巻末の「フランチェスコの聖務日課」が、1436年に誕生したフランソワーズを記念したものだと解釈している¹²⁾。

フランソワーズ時祷書の彩飾様式には1430年ごろに制作された『マルグリット・ドルレアンの時祷書』¹³⁾の影響が歴然としている以上、先行研究で提示された写本の注文・制作着手年代は一見妥当なようではある。しかし前者の写本余白装飾にのみ度々挿入される「プット」は、トゥール地方を中心に15世紀半ばから多用されはじめたモチーフである¹⁴⁾。紋章の描き換えの問題についても、写本の譲渡や所有主の再婚ではなく紋章内容の変容の結果である可能性が高い。というのも2箇所施された紋章には〔図版1-2〕、フランソワーズの再婚相手であるラヴァルのギィ14世が1464年にフランス王ルイ11世から拝領したエヴルーが含まれているのである¹⁵⁾。

以上の見地からは当該時祷書は1450年頃に制作され、フランソワーズによって所有されていたと捉えうるものの、彼女の私的な側面は祈祷文はもとより祈祷像からも判然としない¹⁶⁾。いっぽう当該時祷書の余白装飾には独創性に富んだものが多く、何らかの意図が窺える。そこで次節では、装飾の生成論理を解説することで、当該時祷書に託された祈念の内実を明らかにしたい。

図像・装飾に見るジル・ド・ブルターニュ

フランソワーズ時祷書に特異な図像・装飾プログラムのうち「聖母の嘆きの時祷」の終課冒頭ページ〔図版1〕の余白装飾にかんしては、すでにシルヴァン・エスポズイトによって解釈が提示されている。彼は、余白下部の中央部分に描かれた「青い花を挟んで対峙する人物」のうち、青い服を着た者の胸元に金色のユリの紋章がほどこされていることに着目した。そして両者の険しい表情を考慮した上で、百年戦争下の「フランス」と「イギリス」の寓意と見なしている。さらに両者間を取り合う植物をスコットランドの国花である「アザミ」と同定し、この国をめぐって対立するフランスとイギリスとの関連性を探っている¹⁷⁾。

しかしながら、この図像解釈は容認できない。なによりも描かれている植物が「アザミ」ではなく「ヤグルマギク」と同定できるからである。また紋章から「フランス」の寓意と見なせる「青い服を着た人物」にたいし、「ピンクの服を着た人物」を「イギリス」の表象と見なす決定的な要因は見当たらない¹⁸⁾。ただし、様式的観点からフランソワーズ時祷書が15世紀半ばに制作されたことが確認できた以上、当時重大な局面を迎えていた百年戦争の状況から、この一見不可解なモチーフを考察する必要があるだろう。

公国の泰平のため中立的な立場の維持に努めていたジャン5世が1442年に死去した後、フランソワ1世の治世下(1442-1450)ブルターニュはフランス王軍を支援することになる。かかる政策に反してフランソワ1世の末弟ジル・ド・ブルターニュ(1420-1450)はイギリス王ヘンリ6世との親交を絶たなかったため1446年に捕囚され、4年後には絞殺されるに至った¹⁹⁾。このジルこそがフランソワーズの初婚相手であったことを考慮に入れば、もはやフランソワーズ時祷書における当時の戦局の影響は疑いえない。

じっさい、ここで改めて「ヤグルマギクを争う2人の人物」を検討すれば、ジルの解放要求を口実に1448年のフジェールの襲撃をもって百年戦争を再開させたイギリス軍と、それを迎え撃ち北フランスの奪回をはかったフランス王軍だと同定できる。この見解の妥当性は、ヤグルマギクの象徴性から確認できよう。ヒュドラの解毒剤としてケンタウロスを治癒したこの植物は、キリスト教の象徴体系において「悪魔を打ち負かすキリスト」と捉えられていたのである²⁰⁾。

かかる意図が余白装飾に託されていたとあらば、主題挿絵に描かれた祈念像との関連性にも検討を加えるべきだろう。祝福する「神」のもとに描かれた「聖母マリア」と「諸聖人」に祈りを捧げる女性は、ブルターニュにおける聖母マリアへの篤い信仰心や、中世末期に神と信徒との仲介役として重要性を高めていた聖人を具現化したものと見なしうる²¹⁾。いっぽう、拝跪像の背後に控える「洗礼者ヨハネ」については解釈に困難をとまう。守護聖人を従えた祈祷像は15世紀半ばのブルターニュ時祷書に散見するものの²²⁾、フランソワーズ時祷書において重視されている聖人は、時祷書の基本形にはない祈祷が捧げられた「アレキサンドリアの聖カテリナ」と「聖フランチェスコ」にとどまる。

本時祷書において「洗礼者ヨハネ」の重要性をわずかながらに窺えるのは「と

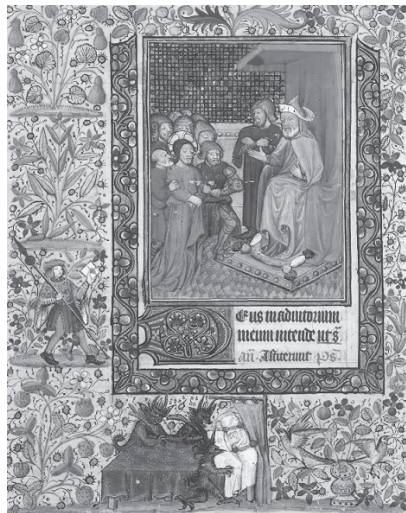
りなしの祈祷」の図像プログラムである〔図版3〕。主題挿絵「キリストの洗礼」の欄外装飾には「洗礼者ヨハネの殉教」「サロメのダンスを鑑賞するヘロデとヘロデヤ」が認められ、植物モチーフのみで装飾されている他の聖人図像との差異は明らかである²³⁾。しかしそれ以上に興味深いのは、ヘロデとヘロデヤの背後に潜む「半獣」の存在である。フランソワーズの画家が携わった『人生の巡礼』²⁴⁾に着想源を求めうる「悪魔」の表象であるが、「サロメのダンス」の図像プログラムに慣例化したものではない²⁵⁾。

一見不可解な図像の解明を促すのは、前述した余白装飾と当時のブルターニュ公国がおかれた状況との関係である。かかる観点からは、非業な運命を辿った「洗礼者ヨハネ」とフランソワーズの夫ジルとの相似性が窺えるのだ。前者が領主ヘロデの行いをとがめたが故に投獄され、その妻ヘロデヤの策略により斬首されたのにたいし²⁶⁾、後者はブルターニュ公フランソワ1世との間の確執ゆえに囚われの身として苦難の日々を送った末、監視者達の手によって不当に絞殺されている²⁷⁾。

フランソワーズ時祷書における不可解な「悪魔」の存在によって、ジルが蒙った災禍を喚起せしめんという意図は「受難の時祷一時課」〔図版4〕の余白下部にも確認できよう。「病（臨終？）の床に伏す者」を襲う「悪魔」の姿が特異であるのは以下の点に明らかである²⁸⁾。死にまつわるさまざまな図像・装飾は、時祷書ではもっぱら「死者の聖務日課」に描かれるものであった²⁹⁾。また15世紀ブルターニュ時祷書に散見する「魂を奪わんとする悪魔」には、それを阻止せんとする天使が常に伴われているにもかかわらず、ここに見る例に後者の姿はない³⁰⁾。だがここで再び史実を顧みれば、ジルの死後間もなく死の病に冒されたフランソワ1世との関連性が浮かび上がってくる。ジルの死がフランソワ1世の命によるものであったとの風評が絶えなかったことも、その証左となろう³¹⁾。

以上の解釈から、主題挿絵に描かれた審問を受けるキリストにジルの姿を重ね合わせることが導かれる。捕らえられてから判決が下されるまで大祭司カイアファ、総督ピラト、ヘロデの審問を経て、ふたたびピラトへの下へと送られたキリストに³²⁾、提訴来不当な裁きを受けるまで4年間も各地を引きずりまわされたジルの姿が透けて見えてくる³³⁾。両者の類似は、法的な過ちを犯していないがゆえに判決を下すことがはばかられていた経緯にくわえ、逮捕以来、と

図版4 『ピラトの審問』



図版5 『埋葬』



図版6 田園風景

もに肉体的・精神的侮辱を多々受けた受難にも指摘できよう。

祈りのかたち

現在まで未解明のまま残されていたフランソワーズ時祷書の図像・装飾プログラムを複合的なアプローチから再検討する過程で、写本の制作過程における社会背景やフランソワーズの境遇までもが明らかとなった。以上の観点から改めて「聖母マリアと諸聖人に祈りを捧げる女性」〔図版1〕を検討すれば、再婚後もジルの魂の救済への祈念を日々欠かさなかったフランソワーズの姿を重ねあわすことが可能となろう。

同様の見解は、当該図像がキリストの受難を悲しむ聖母マリアを主題にした祈祷の「終課」を彩飾するものであったこと、そして「最後の晩餐」に始まる「キリストの受難」の図像サイクルを締めくくるものであったことから導かれる³⁴⁾。さらにこの「聖母の嘆きの時祷」に先行するのがキリストの受難の図像サイクルで彩飾された「受難の時祷」であることに留意すれば³⁵⁾、フランソワーズ時祷書に著しい「キリスト受難」の偏重が単に当時の世相を反映したものではないことも確認できよう³⁶⁾。

フランソワーズの「祈りのかたち」は「死者の聖務日課」にいつそう具現化されている〔図版5〕。祈祷の冒頭ページは「埋葬」を主題としたミニアチュールと「神に不服を申し立てるヨブ」、そして「死」につけ狙われる貴族」で彩飾されている。いずれも「死者の聖務日課」に慣例化した図像ではあるが、このように同一ページの余白装飾をなす例はきわめて特異である³⁷⁾。

一貫した図像プログラムとは見えにくいものの、各モチーフ間には有機的な連関が窺える。「ヨブ記」10章1節冒頭の「私は自分の命を厭う *tedet animam vite*」と記された吹き出しとともに描かれたヨブの下には、そのいたわしい姿を見上げる女性が配置されている。アンドレ・ミュサはこの女性をヨブの妻と見なすにとどまっているが³⁸⁾、相次ぐ不幸に見舞われながらも信仰心を失わないヨブを叱責した彼女が指差すモチーフとのつながりに検討を加える必要があるだろう³⁹⁾。

指し示されているのは「死」に槍をたてられんとする華美な服装の若い男性と、その前に立ちはだかる「猛禽の爪をもつ男性」で表象された「悪魔」の姿である。「死の前の平等」あるいは「死への畏怖」を喚起する両図像に、ヨブの

試練との連関は一見判然としない。しかしながら、フランソワーズの時祷書における一連の寓意表象を踏まえれば、上記のモチーフを莫大な遺産を相続したフランソワーズとの結婚により豪華な生活を営んでいたジル⁴⁰⁾、そして彼を卑劣な方法で死に至らしめる監視人と解釈することができる。ここに満ち足りた生活から一転して苦境に身を委ねることを強いられたジルのヨブの受難から想起させんとする意図が窺えまいか。「死者の聖務日課」が死後煉獄にとどまる魂の救済を求めるための祈りであったことに鑑みれば、フランソワーズの具体的な「祈りのかたち」がいつそう明瞭に浮かびあがってくるのである。

伝統的キリスト教図像にジルの受難を重ね合わせたさまざまな「祈りのかたち」が明らかとなったが、それらがフランソワーズ時祷書の後半部分にのみ認められるとあれば、当該写本に求められた機能や役割が制作過程に従って変容した可能性は小さくない。かかる経緯は2例の「ヤグルマギクを巡って争う2人の人物」の比較に顕著である。「聖母マリアと諸聖人に祈りを捧げるフランソワーズ」〔図版1〕の余白装飾で亡夫の魂の救済を願う図像プログラムの一環をなしている当該モチーフにたいし、時祷書の前半をなすコデックスの冒頭近くでは単なる牧歌的な風景の一部をなしているにすぎない〔図版6〕。両図像の類似性は構図・表情・衣服の色彩にまで及んでいるものの、その意味や機能はまったく異なっているのである。

写本の注文・制作過程を確認せしめる決定的資料が残されていない現在にあっては、ジルの受難を喚起する多様な表象が誰の意図に基づくものかは判別しがたい。再婚する娘が亡き夫の魂の救済にたいする祈念を欠かすことのないようカトリヌが描かせたのか、あるいはフランソワーズが自身の境遇の変遷を反映させた結果なのかという写本の生成過程にかんする問題は、新たな資料・視座から検討すべき今後の課題といえよう。

結びにかえて

本稿ではフランソワーズ時祷書の彩飾要素を多角的に考察し、先行研究では解明されていなかった写本所有者の祈りの内実、ひいては写本の用途の実際を明らかにした。しかし図像プログラムの生成論理は断片的に解明されたにすぎず、さらに考察を深める必要性は否定しがたい。

ブルターニュ時祷書の図像や装飾の多くに百年戦争の影響が窺えることに鑑

みれば⁴¹⁾、時代相・社会的背景を同じくする写本間の比較検討によって、伝統的キリスト教図像に重ねあわされた史実や写本注文主・所有主の心性を浮き彫りにすることも今後の課題として残されている。複雑な政治的駆け引きが断続的に繰り返されていたブルターニュ公国の状況を踏まえれば、写本注文主・所有主の意向と画家の創意とが巧みに交錯するなかで「祈りのかたち」が多種多様に生成されていた可能性は相当に高い⁴²⁾。

以上の調査研究からは、「地域研究の新たな可能性」にも期待がかかる。現在百余りの存在が確認されているブルターニュ時祷書ではあるが⁴³⁾、各写本の使用式や所有者に基づいて帰属・集成されているため、選択されている彩飾様式や図像はきわめて多彩である⁴⁴⁾。それゆえに伝統的な様式・図像考察から地方的特質を包括的に検討することは従来不可能、もしくは無意味と見なされてきた。しかしながら複合的なアプローチから写本彩飾を検討することで、対外戦争はもとよりブルターニュ地域に関わる事象や伝承と、それらへの人々の対応を浮き彫りにする新たな視座、各写本の「固有性」の基盤を成すものから「地域」との連関を解明する新たな視座が提示されるのではあるまいか。

註

＊）本稿は2012年6月1日、成城大学で開催された国際叙事詩学会日本支部総会の発表原稿に加筆・修正を施したものである。当該写本にかんして筆者は他にも祈祷像の同定問題や、写本彩飾の史料的価値にかんする口頭発表もおこなっている。前者の要旨については次を参照——「15世紀ブルターニュ時祷書における祈祷像の多元的考察」、『美術史』、第169号、美術史学会、2010年10月、135-136頁。当該写本の彩飾フォリオはすべてウェブサイトで参照可能であるので（<http://www.bibliotheque-rennesmetropole.fr/>）、本稿では主要図像のみを掲載する。なお主要所蔵機関については以下の略号を用いる——BnF: Bibliothèque nationale de France; BRM: Bibliothèque de Rennes Métropole.

- 1) ブルターニュ時祷書における信心・祈念の表象については、筆者の博士論文を参照されたい——*La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle*, thèse de doctorat nouveau régime, Université Paris X, 2008, t. I, pp. 265-275.
- 2) 拙稿「写本装飾の位相——『マルグリット・ドルレアンの時祷書』の余白装飾——」、『ステラ』第30号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2011年12月、

85-98 頁。

- 3) *Heures de Catherine de Rohan et Françoise de Dinan* (BRM, ms. 34, 34 bis, 34 ter). 当該時祷書にかんする研究としては主に以下を参照——Eberhard KÖNIG, «Enluminure à Rennes à la fin de la Guerre de Cent Ans», in *Artistes, artisans et production artistique en Bretagne au Moyen Âge*, Rennes: Université de Haute-Bretagne, 1983, p. 122; André MUSSAT, «Un manuscrit reconstitué à la Bibliothèque de Rennes», *Bulletin monumental*, n° 144, 1986, pp. 153-155; *Les trésors des bibliothèques de Bretagne*, Rennes: Agence coopération de bibliothèque de Bretagne, 1990, p. 71, n° 19; *Les Manuscrits à peintures: XIII^e-XV^e siècles*, Rennes: Impr. Jet réalisations, 1992, pp. 51-54, n° 12; *La Bretagne au temps des ducs*, Daoulas: Abbaye de Daulas, 1991, p. 68, n° 71; Silvain ESPOSITO, *Les Heures de Catherine de Rohan et Françoise de Dinan: étude du cycle de miniatures et des bordures historiées du manuscrit*, mémoire de Maîtrise, Université Rennes II, 1995; Jean-Luc DEUFFIC, *Notes de bibliologie: Livres d'heures et manuscrits du Moyen Âge identifié (XIV^e-XV^e siècle)*, Turnhout: Brepols Publishers, 2009, pp. 181-186; Diane E. BOOTON, *Manuscripts, Market and the Transition to Print in Late Medieval Brittany*, Surrey: Ashgate, 2010, pp. 65 et 273.
- 4) 革命期に没収された後、レンヌ図書館の母体となった写本については次を参照——Sarah TOULOUSE, «Les Manuscrits médiévaux de la Bibliothèque de Rennes Métropole», in *De bibliotheca publica: mélanges offerts à Marie-Thérèse Pouillias*, Rennes: Ville de Rennes-Rennes métropole, 2010, p. 98.
- 5) *Catalogue of western manuscripts and miniatures*, Londres: Sotheby's, 25 juin 1985, lot 999. 装丁家シミエ父子にかんしては次を参照——Didier TRAVIER, «Les Simier, relieurs du roi et propriétaires sarthois», *Revue historique et archéologique du Maine*, 2003, pp. 121-163.
- 6) 現在未だ欠如しているのは以下の通り——ff. 10, 12, 26, 42, 63, 79, 125 の後の各 1 葉; f. 56 の後の 2 葉; f. 88 の後の 3 葉。
- 7) *Catalogue of western manuscripts and miniatures*, Londres: Sotheby's, 26 novembre 1986, lot 53. 「キリスト降誕」のミニアチュールが施されているこの 1 葉には、現在 34 ter の整理番号が付されている。
- 8) ms. 34 の縦 184 × 横 145 ミリにたいし ms. 34 bis は縦 187 × 横 140 ミリ。
- 9) ケーニヒによるフランソワーズ時祷書の注文・制作過程にかんする論考については以下を参照——Eberhard KÖNIG, «Enluminure à Rennes à la fin de la Guerre de Cent Ans», *art. cité*, pp. 122-123; *Les Manuscrits à peintures: XIII^e-XV^e siècles*, *op. cit.*, p. 52; *La Bretagne au temps des ducs*, *op. cit.*, p. 68. なおケーニヒが推察した写本の注文・制作過程は、次の論考 2 点においても支持されている——MUSSAT, *art. cité*, p. 154; ESPOSITO, *op. cit.*, p. 27.

- 10) フランソワーズの画家が携ったことが確認されている写本は次のとおり—— *Livre d'heures à l'usage de Nantes* (Cambridge, Christ's College, ms. 21) ; *Livre d'heures à l'usage de Rennes* (New York, Pierpont Morgan Library, m. 173) ; *Pèlerinage de vie humaine* (BnF, ms. fr. 376) ; *Livre d'heures à l'usage d'Angers* (BnF. Smaf. 81-27).
- 11) マルグリット・ドルレ안의画家を中心としたレンヌにおける写本画アトリエの存在は未解明ではあるが、同画家の影響は次のレンヌ使用式の時祷書に確認されている—— *Heures à l'usage de Rennes* (Baltimore, Walters Art Gallery, ms. 221) ; *Livre d'heures à l'usage de Rennes* (BRM, ms. 28).
- 12) BOOTON, *op. cit.*, p. 65.
- 13) *Heures de Marguerite d'Orléans* (BnF, ms. lat. 1156B). 1955年に開催された展覧会のカタログにおいてジャン・ポールシェは、フランソワーズの時祷書をローアンの画家のアトリエに帰し、余白装飾のみにマルグリット・ドルレ안의画家の影響を見出している。Voir *Les Manuscrits à peintures en France du XIII^e au XVI^e siècle*, Paris: Impr. A. Tournon, 1955, pp. 111-112, n° 238.
- 14) ルネサンス期のイタリア芸術に散見する「ブット」が1450年ごろのトゥール地方で多用されたことから、イタリア滞在を経たジャン・フーケの影響が窺える。Voir Nicole REYNAUD, *Jean Fouquet: Les Heures d'Étienne Chevalier*, Dijon: Éd. Faton, 2006, p. 30.
- 15) DEUFFIC, *op. cit.*, p. 184.
- 16) 14世紀後半から著しく発展した衣装文化やその緻密な描写への関心の高まりによって、写本制作の年代特定や人物の同定が可能となった例は少なくない。しかしながらフランソワーズ時祷書に描かれた女性がまとう衣装や装飾品は14世紀末各種儀式で王侯貴族に常用されていたものに過ぎず、同様の成果は望めない。中世後期の衣装文化にかんしては主に以下を参照—— Monique DEPRAETERE-DARGER, «Évolution et signification sociale du costume du XIII^e au XV^e siècle», in *Tissu et vêtement: 5000 ans de savoir-faire*, Guiry-en-Vexin: Musée archéologique départemental du Val-d'Oise, 1986, pp. 130-136; Françoise PIPONNIER et Perrine MANE, *Se vêtir au Moyen Âge*, Paris: Société nouvelle Adam Biro, 1995; Odile BLANC, *Parades et parures*, Paris: Gallimard, 1997.
- 17) ESPOSITO, *op. cit.*, p. 27.
- 18) クリスチアン・レイノーによれば同等権力の表象として青に対置される赤にたいし、ピンクなどの柔和色は「軽視された」、或いは「重要ではない」と判断された人物に使用され二者間の格差を示唆しているという (voir Christiane REYNAUD, *Images et pouvoirs*, Paris: Le Léopard d'or, 1993, p. 15)。かかる見解に従えば、当該モチーフに「イギリス」にたいする「フランス」の優位性を看取することは可能である。
- 19) ジル・ド・ブルターニュとフランソワ1世の確執は、ジャン5世の相続問題にも依拠している。百年戦争下の複雑な政治的駆け引きが絡むジル・ド・ブルターニュと

- フランソワ 1 世の両者間の諸問題については以下を参照——Arthur de LA BORDERIE, *Histoire de Bretagne*, Rennes: Librairie générale de J. Plihon et L. Hommay, 1972, pp. 313-341; L-F LA BESSIÈRE, «Seigneurs angevins au XV^e siècle: Gilles de Bretagne et Françoise de Dinan», *Revue de l'Anjou*, juillet-août 1902, n° 44, p. 108.
- 20) Mirella LEVI D' ANCONA, *The Garden of the Renaissance: botanical symbolism in Italian painting*, Florence: L. S. Olschki, 1977, p. 113. なお当該植物の様々な時代・文化における象徴性については次を参照——小林頼子『花と果実の美術館』, 八坂書房, 2010 年, 82-85 頁。
 - 21) Georges MINOIS, *Nouvelles hitoires de la Bretagne*, Lille: Fayard, 1992, p. 382.
 - 22) 守護神を従えた写本所有主の図像は, 次のブルターニュ時祷書に認められる——*Heures de Marguerite de Fontenay* (Cambridge, Fitzwilliam Museum. ms. 62); *Heures* (Boston, Public Library. ms. q. med 81); *Heures d'Isabelle Stuart* (BnF, ms. lat. 1369; ms. n.a.l, 588); *Heures de Jean de Montauban et Anne de Kéren-raï* (BnF, ms. lat. 18026); *Heures de Jean de Montauban* (BRM, ms. 1834).
 - 23) フランソワーズ時祷書の「とりなしの祈祷」には次の聖人図像が含まれている——f. 71, 聖ステパノと聖ラウレンチウス; f. 73, 聖ペテロと聖パウロ; f. 74, 福音史家ヨハネ; f. 75, 聖クリストフォロス; f. 76, 聖エウスタキウス; f. 77, 聖マグダラのマリア; f. 78, アレキサンドリアの聖カテリナ; f. 79, 聖マルガリタ; f. 80, 聖アポロニア; f. 85, 聖アンナと聖母子; f. 86, 聖ユルバヌス; f. 87, 聖セバスチアヌス; f. 88, 大天使ミカエル; f. 89, 聖フィアクルス; f. 90, 聖アントニウス。
 - 24) *Pèlerinage de vie humaine* (BnF, ms. fr. 376). その彩飾フォリオはすべてウェブサイト (www.mandragore.bnf.fr) で参照可能である。
 - 25) 当該図像の特異性はすでにジャン・ポルシェによって指摘されはいるものの (voir *Les Manuscrits à peintures en France du XIII^e au XVI^e siècle*, *op. cit.*, p. 112), その解釈については現在まで全く提示されていない。
 - 26) Mt 14, 3-11; Mc 6, 17-28.
 - 27) ジルが逮捕されてから絞殺されるまでの経緯は次を参照——LA BORDERIE, *op. cit.*, pp. 327-339.
 - 28) エスポジットは当該モチーフを「病におかされた女性」と見なしながらも如何なる解釈も提示していない。Voir ESPOSITO, *op. cit.*, p. 125.
 - 29) 「死者の聖務日課」の図像にかんしては次を参照——Millard MEISS, «La mort et l'office des morts à l'époque du Maître de Boucicaud et des Limbourg», *Revue de l'Art*, n° 1, 1968, pp. 17-25; Danièle ALEXANDRE-BIDON, «La Mort dans les livres d'heures», in *À réveiller les morts au quotidien dans l'Occident médiéval*, Lyon: Presses Universitaires de Lyon, 1993, pp. 83-94.
 - 30) 拙論 *La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle*, *op. cit.*, t. I, p. 100.

- 31) 1450 年 4 月 25 日にジルが、そして同年の 7 月 17 日にはフランソワ 1 世が死を迎えている。ジルの死をフランソワ 1 世に帰する風潮は 19 世紀まで続いたが、現在ではその可能性は否定されている。Voir LA BORDERIE, *op. cit.*, p. 313.
- 32) Mt 27, 11-26; Mc 15, 1-5; Lc 23, 1-25; Jn 18, 28-40.
- 33) 『ピラトの審問』に現実世界の事象を重ね合わせる意図は *Heures de Marguerite d'Orléans* (BnF, ms. lat. 1156B) にも認められる。前掲拙稿「写本装飾の位相——『マルグリット・ドルレアンの時祷書』の余白装飾——」, 97 頁参照。
- 34) 「聖母の嘆きの時祷」各課の彩飾については他に例を見ず、着想源の解明が今後の課題として残されている。各課冒頭を彩飾する主題は次のとおり—— f. 27, 最後の晩餐（朝課）; f. 44 v, 聖母マリアと聖マグダラのマリア（一時課）; f. 46 v, 聖散布を準備する聖母マリア（三時課）; f. 48, 福音史家ヨハネの訪問（六時課）; f. 49 v, 磔刑（九時課）; f. 51, 十字架降下（晩課）; f. 56 v, 諸聖人に囲まれた聖母マリアに祈りを捧げる女性（終課）。
- 35) 「受難の時祷」各課の図像主題は次のとおり—— f. 1, ユダの接吻（朝課）; f. 11 v, ピラトの審問（一時課）; f. 14, 十字架道行（三時課）; f. 22, 磔刑（九時課）; f. 27 v, 十字架降下（晩課）; f. 31, キリストの埋葬（終課）。
- 36) 15 世紀ブルターニュ時祷書における様々な受難の表象にかんしては拙論を参照されたい—— *La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle*, *op. cit.*, t. I, pp. 117-124.
- 37) ケーニヒは本図像プログラムの特異性を指摘しながらも、その解釈の検討には及んでいない (voir *Les Manuscrits à peintures : XIII^e-XV^e siècles*, *op. cit.*, p. 53)。「死者の聖務日課」は「晩課」「朝課」「賛課」の 3 つの定時課からなる。多くの時祷書において「晩課」冒頭のみに施されている図像・装飾には、写本制作年代の「死生観」が窺える (voir François ARNÉ, «Les images de la mort dans les livres d'heures (XIII^e-XV^e siècle)», *La Maison Dieu*, n° 145, 1981, pp. 127-148)。15 世紀ブルターニュ時祷書において採択されている図像主題については拙論を参照—— *La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle*, *op. cit.*, t. I, pp. 250-257.
- 38) MUSSAT, *art. cité*, p. 153.
- 39) Jb 2, 9.
- 40) ジルとフランソワーズの結婚にかんしては次を参照—— LA BORDERIE, *op. cit.*, pp. 319-321; LA BESSIÈRE, *art. cité*, p. 108.
- 41) 前掲拙論, t. I, pp. 272-274.
- 42) かかる見地から着手した *Les Heures de Pierre II* (BnF, ms. lat. 1159) の調査結果については、その一部を 2012 年度日本フランス語フランス文学会秋季大会 (10 月 20 日, 神戸大学) において報告した。
- 43) レンヌ図書館は近年ブルターニュ時祷書の蔵書を着実に充実させている。2007 年までに収集された写本リストについては次を参照—— TOULOUSE, *art. cité*, p. 99.

- 44) この問題については次の拙稿を参照——« Une nouvelle réflexion sur le style de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle », in *Effets de style au Moyen Âge*, Aix-en-Provence : Presses Universitaires de Provence, coll. « Senefiance », n^o 58, pp. 260-261.

CRÉDITS PHOTOGRAPHIQUES (Bibliothèque de Rennes Métropole)

Fig. 1 : Françoise de Dinan en prière. Ms. 34, f. 56.

Fig. 2 : Françoise de Dinan agenouillée devant la Vierge à l'Enfant. Ms. 34, f. 66.

Fig. 3 : *Le Baptême du Christ*. Ms. 34, f. 72.

Fig. 4 : *Le Christ devant Pilate*. Ms. 34, f. 11 v.

Fig. 5 : *L'Inhumation*. Ms. 34 bis, f. 107.

Fig. 6 : La scène fluviale. Ms. 34 bis, f. 27.